

天に登録された名

72 人が帰ってきます。派遣された町や村から帰ってきます。そしてイエスさまのところへ行き、報告をします。その内容はおそらく様々だったでしょうが、彼らの一番の関心は、イエス様のお名前を使うと悪霊もわたしたちに屈服しますというものでした。科学的な治療法がなかった時代に、悪霊に憑かれているという名目で処理されていた事柄は多かったでしょう。悪霊から解放された人は社会復帰を許され、ふたたび交わりに生きる道が開かれました。弟子たちも誇らしい気持ちになったであろうことが想像できます。喜んで帰ってきて、とルカは記していますので、小躍りするような感じだったのでしょう。ルカがこれを記したのは、報告のまっさきに弟子たちがこれを上げたためか、どの弟子たちもこのことに強い関心を示したためか、あるいはイエスさまが彼らの報告を聞いてコメントしなければならぬと思われたからか、そこのところは明らかにされていません。しかし、わたしたちにも示唆を与える出来事となったのは間違いありません。さて今日から、神学生の夏期伝道実習が始まりましたが、神学校では夏期伝道実習前に壮行会があり、それぞれの実習先が紹介されます。また9月に入りますと全国から帰ってきた実習生による夏期伝道報告会もあり、そこで恵みの分かち合いをします。礼拝をしたのち、全員は無理ですので3人ほどチャペルで実習中の体験を話し、恵みの共有をします。召されていること、仕える者としての志を確認する機会となります。成功体験よりも失敗の方が重要です。基本的に砕かれにゆくのですね。キリスト・イエスを宣べ伝えるために不要なものは取り除かれなければなりません。わたしも4年生のときに高知県の西部の教会一、土佐福音教会・佐川教会・須

崎教会・中村栄光教会に派遣された実習の報告をしたことがあります。やはり、自分が砕かれて、主が生きて働いておられるということをごどのように知らされたかという証になりましたし、そこで示されたことが神学校に帰ってから解決すべき自分自身の課題となりました。伝道者としての存在に関わるわけですから、実存的な問題ですね。また日本各地の報告がされますから、地域によってさまざまな課題があることを知らされます。それぞれの地で主の召しに生きる群れに、御言葉を通して仕えるときが与えられるのです。そういう思いをもって、このルカによる福音書の伝える伝道報告を振り返りますと、主であり、教師であるイエスさまの指導、導きの力が見えてきて興味深いです。主イエスはご自分が行くつもりであった町々や村々へ 72 人を 36 組に分けて送り出されたわけですが、帰ってきた弟子たちがまっさきに報告した内容が、お名前を使うと、悪霊たちもわたしたちに屈服します、でした。いわゆる悪霊追放ですね。これは主の御名には力がある。御言葉には力があるという、彼らの能力をこえた権威と力に仕える者とされていること、主から託されたその力と権能を管理する者とされているのがキリスト者であるという、弟子としての原点となるべき体験でした。この彼らの報告を聞いてイエスさまはふたつのことを語られます。彼らが体験した出来事、彼らが抱いている思いに、御言葉によって輪郭を与えることを目的とした語りかけです。ひとつめはご自分がこの世の悪霊、そうしたものに代表される悪の力に対する最終的な勝利者であるという真実です。これをお伝えになりました。蛇もさそりも彼らに害することはできない。サタンの力に対する最終的な勝利はご自身にあると宣言されました。この世にはさまざまな悪があり、混乱があり、戦争も尽きることがありません。神はどこにいるのかという問いを投げかけら

れるわたしたちにとって、これは主イエス・キリストの約束であり、同時に挑戦と言ってもいいお言葉です。しかし、ここは先週も指摘したことですが、イエスさまは世の終わりに目を注いでおられるのです。主イエスは、神の国の訪れを宣べ伝えるのに、「収穫は多いが働き手は少ない。だから収穫のために働き人を送って下さるように、収穫の主に願いなさい」というお言葉を派遣にあたって贈られました。神の国の到来は収穫に譬えられているのです。それは創造によって神が始められた世界が、神さまご自身の手によって完成されるという終わりの日の希望、収穫の喜びに属する事柄なのです。これは基督教の時間理解と申しますか、世界観の基本であり、なんとなく輪廻転生的に、輪のような繰り返しをイメージするわたしたちの時の理解とは異なるものです。収穫の時、刈入れに向かって時は進んでいく。終わりの日がくる。わたしたちはその日に備えて生きるのです。主イエス・キリストが見ておられるのは、この収穫のとき、つまり刈入れであり、基督教の枠組みでは創造主による完成の時です。そしてそれは弟子たちが先に遣わされ、後から主が来られるという伝道の構造。すなわちキリストの再臨とかかわる出来事なのです。この終わりの完成の時、収穫に、わたしたちキリスト者は関わっていることを忘れてはなりません。野球に例えるのが適切かどうかちょっと迷いますが、9回裏まで時は進み、試合終了を告げるのは神さまなのです。わたしたちは3回の表くらいにいますが、その中で一喜一憂している。わたしたちはいつも短いスパンでしか物事を見ることができず、状況の支配者であろうとし、結果を求めてあがきまです。しかし、詩篇の詩人が「千年といえども御目には 昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません」とうたったように、神さまだけが永遠をその手にもっておられるのです。わたしたちは

一瞬にして飛び去る存在でしかありません。草花のように一瞬花を咲かせますが、すぐに枯れ、その咲いていた場所を知る人もいないのです。しかし、それが神のみ心にかなった業であるならば、神さまは必ず事柄を良い方に導いてくださいますし、必要な出来事を起こして下さる方です。最終的な勝利者はキリストである、始められた方がその責任においてこの世界を完成されるという信仰の奥義を、キリスト・イエスに結ばれている者たちは知らせて頂いたのです。この最後の秘密に与ることが許されたことが、ここでのイエスさまの教えのポイントです。お名前を使ったら悪霊も従いました、ということの先に、終わりの日の神による勝利が約束されているのだよ、この真理を希望と慰めとするように教えられたのです。目から鱗が落ちるような指摘ですね。またこの理解があるからこそ続いて、あなたがたは悪霊がお名前を使ったら従ったということを楽しんでいるけれども、それはずれている。喜ぶポイントはそこではなく、あなたがたの名が天に記されていることを喜びなさいという、さらなる秘密を明かして下さったのです。これは信仰を与えられたものの喜びの根拠はここにあるのだということですが、これも教えていただかなければ決して知る事の出来ない秘密でしょう。だからこのすぐあとの 23 節で、イエスさまは弟子たちを振り向いて、「あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ。言うておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである」と仰られるのです。あなたがたの名が天に記されていることを喜びなさい、というイエスさまのお言葉は、この地上においてすべての帳尻をあわせようとし、ひとかどのものになろう、名を残そう、とするわたしたちに全く別の角度から光をあてます。

キリスト者は、キリストを通して、創造主である神を父として持つことが許されている。そのことによって永遠を望み見ることが許されている。そこに新しく天という神さまのおられる領域を望み見ることが許されているという驚くべき消息を伝えるのです。先程、わたしは、わたしたちは野に咲く花のように一瞬にして飛び去り、その生えていた場所を知る者もいなくなると言いました。地上の出来事はみなそのようなものです。しかし、創造主である神はわたしたちを御心に留めて下さっている。流れ去ることのない天の領域で覚えられ、まなざしを注がれているのだと、イエスさまは教えてくださったのです。弟子たちは、ハッとして天を仰いだのではないのでしょうか。

この主イエスのお言葉があるからこそ、のちにパウロも「あなたがたの国籍は天にあります」という有名な言葉をフィリピの信徒たちに書くことが出来たのだと思います。それは神のご計画によって選ばれ、キリストに結ばれ、派遣される者たちに対するキリスト・イエスの約束にもとづくものです。あなたがたはわたしに結ばれたことにより、天地の創造主である神を、父と呼び、天に覚えられる存在とされている。この視点をわたしたちも覚えたいのです。伝道とは天につなぐ働きをすることなのです。弟子たちが派遣をされ、救われた者が与えられることはキリストの喜びであり、教会の喜び、そしてそれは天に大きな喜びのある出来事であることが、このあなたがたの名前が天に記されていることを喜びなさいというキリストの発言から分かるのです。わたしたちはこの秘密によって守られています。感謝して、伝道という喜びの業とともに仕えたく願います。

お祈りいたします。